

## センセーショナルなヴェルザー・ロメストの突如登場

9月1日に始まったウィーンの新シーズン、今回は例年以上に力が入っているように開幕早々から、いろんな意味で(一)熱気に覆われている。まずオーブニングの《トリスタンとイゾルデ》(後述)では藤村実穂子(ブランゲ)役で大好評! 以外は5月のプレミエ・メンバーがそろい、なにより指揮のクリスティアン・ティールマンがプレミエ以上に自由奔放で、目くるめく彼の音楽に客席は煽られ揺さぶられる言葉も出ないほど。ところが翌日、これほど絶好調のティールマンが以後の2公演をキャンセルすると発表して大騒動を巻き起こした。ピンチ・ヒッターが「噂の」フランツ・ヴェルザー・メストだったために、よけい騒ぎが大きくなったのだ。

イオアン・ホーレンダー監督が「ポスト小澤」と1年前に公言したこともある。意中の人物であるのだが、レバートリー・システムのウィーンでは十分なブローベが取れないことを理由に、彼は1988年以來ここには登場していない。ところが今回はどうしたことか、まったくリハールなしのぶっつけ本番で5日(および9日)の公演を指揮、それが絶賛されているのだ。

この間、4日と8日にはチューリヒで《タンホイザー》を振っているため、彼は大変な無理をおしてウィーンの窮地を救ったことになり、ホーレンダーは「ドイツ語のヴェッキャブラリーには、彼に対する感謝の気持ちを表す言葉がない!」とまで感激。また、「飛び入りで《トリスタン》を振って

成功したのは1937年のカラヤン以来!」と、もう「神話」が作られている。

2日はダニエーレ・ガッティ指揮、トーマス・ハンブソン、フェルッチョ・フルラネット、ジュゼッペ・サツパティ二出演の《シモン・ボッカネグラ》(ヴェルディ)。バルバラ・フリットリが同時期のスカラ座日本客演に同行できず、《オテロ》に出演できなかったいわく付の公演でもあるのだ。3日の《ホフマン物語》では、8月のザルツブルク音楽祭における熱演ぶりが記憶に新しいニール・シコフが同じロールでまたまた大爆演。12日からはじまる《エロディアド》(マスネ)にはホセ・クーラとアグネス・バルツァ、17日からは《ニールングの指環》4部作がバイロイト音楽祭と同様、アダム・フィッツシャー指揮でスタートし、その後はファン・デイエゴ・フロレスの《セビリヤの理髪師》、26日には小澤征爾が帰任してアンゲラ・デノーク、バルツァ出演による《イエヌーフア》(ヤナーチェク)。また、ジョン・健・ヌッツォが《シモン・ボッカネグラ》《ホフマン物語》《エロディアド》で活躍している。

なお、10月にはプレミエ第一弾として《ファルスタッフ》がファビオ・ルイージ指揮、マルコ・アルトゥーロ・マレッリ演出、美術、ブリン・ターフェル出演、11月は《フィガロの結婚》音楽新校訂上演で小澤の指揮(来年秋の国立オペラ日本公演でも上演される!)。以後のプレミエは12月

を変えて棒にビツタリ付いている様子はただごとではない。息の長い高揚感から宇宙的に広がる見事な指揮ぶりに、カーテン・コールでは客席からの拍手に負けじと（一）、オーケストラ・ピットからあられだけ盛大な拍手が寄せられれば、彼も指揮者冥利に尽きるといふものであろう。

このところ世界各地での活躍ぶりが目立つギエンター・クレマーの演出は、台本の積極的な読み変えもせず、全体に静的な時間が支配する舞台だが、幕切れでのトリスタンの「救済」はない。いろいろ伏線を張りめぐらせて知的興味を喚起しながら、また総譜の時間的経過を計算に入れて、登場人物の動きと巧妙にシンクロナイズさせるところが面白い。第一幕、ブランゲーンが薬を盛るシーンで、普通はずでに媚薬が入ったグラスを持って出て来るわけだが、クレマー演出ではイゾルデ看視のもとで毒薬を注がせるため、以後、いかにして媚薬に交換するかというところでブランゲーンが大立ち回りをして、すばらしい見せ場

Premler  
 フォルクスオーパー  
**ロッシーニ《イタリアのトルコ人》**

2003年6月2日初日 指揮:ピエトロ・リッツァーノ/演出:トミンク・メンタ/美術:ヴェルナー・ワッテ  
 ルリ/衣裳:イングリッド・エルプ ●ドン・ジョーニオ/ドン・ジョーニオ/中嶋彰子/サイター・ベネボ/ア  
 ルバザール/ステファン・シャウテン/ディエゴ・ニコニオ/ニコニオ/ナルチーゾ・マツテオリ  
 ー/詩人:アドリアン・エレド/セリム・ビヤル/トニー・アクリスティン

中嶋彰子が大向こうを唸らせたロッシーニ

6月でフォルクスオーパー監督を辞任するドミンク・メンタの最後のプレミエである。彼自身が演出した《イタリアのトルコ人》では、まずフィオリツァに扮した中嶋彰子の奮闘ぶりが話題になった。オペレッタなど軽い演目と同時に《椿姫》でも評価の高い中嶋だが、今回は様式の厳格なロッシーニの難曲で大向こうを唸らせているの

になっている。テーブルに置かれた毒薬入りのふたつのグラスのうち、ひとつめはイゾルデの目を盗んで素早く毒薬を捨て、媚薬に入れ替える。問題はふたつ目のグラスで、トリスタンが手に取ろうとした、まさにその瞬間にブランゲーンはテーブルの上を身を翻してグラスを倒してしまふ。それで残された方のグラス（媚薬入り）をイゾルデとトリスタンがともに飲むことになり、その間、舞踊の振付けにもふさわしいほどのタイミングで進行するのだ。ただ第二幕以降、場の転換のために暗転幕を頻繁に使っているのが煩わしい。

デボラ・ヴォイトがイゾルデに初挑戦して、彼女らしい、じつに楽譜に忠実に整った歌唱だ。トリスタン役には臆病とも思われるほど慎重だったトーマス・モーザードが、控えめな表現で役柄への踏み込みが足りない点が指摘されるだろう。ペトラ・ラング（ブランゲーン）、ロベルト・ホル（マルケ王）はそれぞれよく歌っていて、音楽的には至福のひとつだ。

だ。舞台は現在のナボリのレストランで、ドン・ジェローニオはオーナー兼コック、フィオリツァは女将の設定としているが、ハッピー・エンドとはならず、フィオリツァが苦悩する辛いフィナーレとなっているところがメンタ一流のヒネリだ。  
 なお、フォルクスオーパーの新シーズンではルドルフ・ベルガー新監督が「ウィン

ナー・オペレッタの復権」をモットーに掲げていて、プレミエは《マルタ》（フロトウ）、《ボッカチオ》（スツベ）、《蝶々夫人》（ザルツブルクの《後宮よりの誘拐》）でスキャンダルを巻き起こしたステファン・ハーハイム演出）、《ヴェネツィアの一夜》

（ヨハン・シュトラウス）。第一ソプラノの中嶋は《ヴェネツィアの一夜》プレミエ（6月5日）のほか、レパードトリの《椿姫》、《ヘンゼルとグレーテル》（フンバードイック）、《魔笛》《イタリアのトルコ人》などに出演が予定されている。



ロッシーニ《イタリアのトルコ人》で高い評価を得た中嶋彰子